

長男正樹との永別

長男正樹は、昭和十三年二月六日、横浜の磯子で生れた。当時私は横浜税務署長で、住居は芦名橋の近くにあり、磯子の浜から一町ほど離れたところにあつた。どこか磯の香のする閑静な住居であつた。

当時の横浜は、関東大震災の傷跡が未だに残っており、名古屋や神戸に較べて、担税力も弱かつた。外国貿易の主導権は、すでに日本橋や丸の内に移り、横浜は単なる中継貿易港に転落しつつあつた。その頃の横浜には半井知事、青木市長、高橋税関長がおられ、定期的に若い税務署長の私を昼食に招いて何くれとなく指導して下さつた。また市井の人々には、いわゆる「浜っ子」に特有の氣質があつて、何となく親しみやすかつた。私も住むにつれてだんだん横浜に惹かれるようになり、その後大蔵本省に勤務するようになってからも、横浜の本牧に自宅を構えて、三年ほど厄介になつたものである。

長男正樹が生れた年の七月、私は仙台国税局（当時の税務監督局）の間税部長に転勤を

命ぜられ、私ども一家は仙台に赴任した。その頃の彼はどちらかといえば蒲柳の質で、よく病気もしたし、癩の強い神経質な子であった。昭和十四年六月、東京に帰ってからは牛込に住み、戦争末期には九段の暁星学園初等科に入学した。神楽坂を下りて、国電飯田橋駅の前を通って通学していた彼のあどけないランドセル姿が今なお忘れられない。このミッシヨン・スクールに入学したことが、後年彼がキリスト教に入信する機縁になった。

昭和二十年に入って戦争はいよいよ最悪の段階に踏み込み、空襲は日増しに激化していった。牛込の私の家の前には川合玉堂画伯、左横隣には歌舞伎の中村吉右衛門文、右横隣には古河財閥の総帥古河從純氏がそれぞれ住まっておられた。古河家には大きい立派な防空壕がつくられていて、私の家族は、よくその防空壕を利用させてもらっていた。昭和二十年五月の空襲の時、私は正樹を連れて例の防空壕に待避したのであるが、彼は私の制するも聞かないで壕から抜け出し、東京の夜空を真昼のように真赤に染めて降りそそぐ爆弾の雨を見たがら、「お父さん、綺麗だよ。出て見な」といいながら手をたたいているのである。その時の邪気のない顔も忘れられないスナップである。

それから間もなく、牛込の家は戦災のため灰燼に帰したので、私は妻と子供を岩手県

一関市在の親類に疎開させた。正樹は岩手県の小学校に通学していたが、親類には醤油屋もあれば食料品店もあり、薬屋もあれば呉服屋もあるという具合で、何不自由なく戦争末期をすごさせてもらった。九月に帰京してからは、彼は最寄りの千駄木小学校に通った。有名な落語家志ん朝さんとは幸に同級であったが、四年生になってからはもとの暁星学園に復帰した。フランス語担当の大橋先生に見出だされて、フランス語の演劇に出してもらったことが、とても嬉しかったようである。

暁星学園の初等科から中等科を了えて、彼は成城学園の高校に入学した。それから三年間、最寄りの国電日暮里駅から新宿を経由して小田急線で通学した。病弱だった彼も、高校時代からはメキメキ体力が充実して、活動も活発になっていた。小野嘉寿雄先生の愛情のこもったスバルタ式な教育で随分と鍛えられたようである。小児科の和田先生夫人の紹介で本郷のテモテ教会に日曜毎に通うようになり、同教会の高瀬恒徳先生ご夫妻に私淑するようになったのもその頃のことである。その道縁は彼の死まで続き、告別式もまた同教会で、高瀬先生の司祭の下に行われた。

成城学園の高等部から慶応大学の法学部に進んだのは、昭和三十年の春であった。大学

に入ると例によつて運動各部からの勧誘があつたが、私は正樹から「合気道をやらせてもらいたい」という申し出を受けた。「合気道」なるものがどんなものか、全くの門外漢であつた私は、ちよつと返答に窮した。彼は異常なまでに真剣で、自分の全てをこの道に賭けるといわんばかりの意気込みであつた。私はやむなくこれを認めたのであるが、全国各大学にさきがけて慶応に「合気道部」ができたのは、それから間もなくのことであつた。植芝先生との道交、さらには竹中脩介君等との交友は、この合気道を媒体にして恵まれたものである。クラス・メートには鈴木茂夫君、森田正雄君、牧野恒久君等がいて、兄弟以上の交わりを終生続けることができた。彼の病床を見舞うことを日課のようにしてくれたのもこの人達であり、彼の死を最も悼んでくれたのもこの人達であつた。慶応では内山先生のゼミナールで、国際政治史を専攻していたよつた。

正樹は人と人との関係については、神経質なまでに細心かつ周到で、またとことんまで親切でもあつた。私の健康に対する配慮は妻以上であつた。祖父に対するいたわり方も格別なものであつた。眼や足がやや不自由になつてきた祖父の眼となり足となつて、各地の温泉を巡つたり、景勝の地を遍歴したりしてくれた。弟妹に対しては、その欠点を指摘す

るよりはむしろその長所を賞めて、よく励ましていたようだった。

正樹は不幸な人々に対する同情の念が篤かった。大学在学中も、眼の見えない高校生達のために毎週護国寺付近にある盲学校に行つて、彼等のもとめる本を読んであげていたことを私は後になつて知つた。また、その人達を自宅に招いて、食事を差上げたり、音楽を聞かせたりしたことも何回かあつたようだ。家のお手伝いさんと自分達家族との間に、食事その他の処遇に少しでも差別があれば、それは彼にとつて耐え難いことであつたようだ。最近になつて判つたことであるが、自分の限られた小遣いをさいて、何年もの間貧しい友の学費を補給していたようだ。

慶応卒業後、私は正樹を神崎製紙株式会社に預ける決意をした。私の敬慕する先輩加藤藤太郎同社社長の膝下で、三、四年訓練させていただいた上、自分の下に引取るうというのが私の計画であつた。彼も素直にそれに同意し、私の親友遠藤福雄君の管理下にある同社に入れてもらったのが、昭和三十四年四月であつた。

彼は、数カ月かかつて紙の工程管理の實際を勉強した。その後企画室に入つて、原価管理の仕事をやっていたようである。私は、工場といつてもそれは一つの巨大なヒューマ

ン・リレーションズであるから、各工程で働く人々と本当の友となり、お互いに知り合い触れ合い感じ合わなければならない。仕事と人が二重写しで自分の目に映ずるようにならなければ、本当の原価管理等はできるものではないということを繰返し注意していた。彼もそのことに興味と誇りをもっていったようである。

彼が尼崎勤務中、自宅に帰ってきたのは正月休みだけであつたが、帰宅するや否や友人との打合せをしてすぐ出かけて行つたり、大勢の友達を連れて帰ってくるという始末で、終始ジツとしておれなかつたようである。永い間せき止められていた友情の流れを、一度にとり戻そうとしているように見えた。彼は尼崎工場にいたが、私がたまたま大阪や神戸に行くとき、その行き帰り駅のホームの片隅からヌーと出てきて握手を求め、「いらっしやい」とか「気をつけて」とかだけいって、すぐまた人波のうしろにかくれていくのであつた。私にとって、その大きい手のぬくもりと重量感がたまらなくなつた。ところが、その間、一度も小遣いをねだられたことはなかつた。

三年余りの修業がすぎたので、昭和三十七年の春、私は神崎製紙にわがまをいって、正樹を引き取らしてもらつた。前々から妻は彼を二、三年ドイツに留学させることを希望

していたが、私は本来留学ということを好まなかった。外国に留学することは外国を学ぶということだけではなく、それを通して日本をよりよく知るための方便に過ぎない。そのためにはそう永く滞在する必要はない、旅行だけでたくさんだというのが私の考え方であったので、私は正樹に外国旅行をさせることにした。

昭和三十七年七月一日、彼は四十カ国におよぶ野心的な計画をみずから立てて、勇躍羽田を発つてハワイに向けて出発した。たまたま私は、彼が出発して間もなくの内閣改造によつて、官房長官から外務大臣になった。そのことをロスアンゼルスで知った彼は、父が大臣になった以上、在外公館で厄介になつたりしては迷惑をかけることになるといつので、終始自分の身分を秘して北米と南米の各地を旅行しようである。その年の九月、国連総会出席のため、私はニューヨークに行き、そこで彼と落ち合った。

これから欧州にかけて約二週間、彼は私の私的随員という格好で一緒に旅行した。着替えから洗濯物までいちいち世話をしてくれた。彼の語学力は英語、仏語とも至つて弱くかつブロークンであつたが、なかなか大胆で日常の用を足していたばかりか、訪問国の外相その他の要人とよく談笑していた。とりわけオランダの外相ルンスさんとは余程気が合つ

ていたようである。ローマ法王ヨハネス二三世に謁見を許された時は、いやに緊張していた様子であった。私はその時、アメリカからロンドンに渡り、パリ、ローマ、ボン、ブリュッセル、ハーグを経てアムステルダム経由帰国したので、正樹とはアムステルダム空港で別れた。

その後彼は、単身旅行中ウィーンで歩行が不自由となり、已むなく二十日間も内田大使の公邸で厄介をかける始末になった。彼の生命を奪った難病は、すでにその当時から彼の身体を冒しつつあった。内田大使ご夫妻やご家族のお心のこもった看護でやや小康を得たので、彼はアフリカ、中近東、東南アジアを回って、約束通りクリスマスの前日帰国した。

春になったので、私は彼を郷里香川県の方に挨拶がてら旅行させた。彼は香川県生れではないが、香川県人だという強い自覚をもっていた。学生時代も休暇の時は墓参によく帰ったものだ。彼は讃岐の春を心ゆくまで味わうつもりでいたようだ。たまたまその途次、彼は坂出市の親類森田家に投宿した。森田夫人がたまたま眼科医であるところから、正樹の眼球に原因不明の出血を発見して、病態の容易でないことを注意されたので取急ぎ帰京した。帰京後、東大病院で診察を乞うたところ、どうもこれはベーチェット氏病という世

界的にも例の乏しい難病であろう、ということであつた。そこで直ちに、東大病院に入院して鋭意加療に努めたが、病状は日増しに悪化の道を辿るかのようであつた。私どもは東大の治療に加えて、注射、投薬、服薬、さらには指圧、マッサージ、遂には加持祈禱の類に至るまで、百方手を尽し懸命の努力を傾けたものである。

しかるに眼の出血は、その後もやむことなく、遂に右眼は失明に近い状況になつた。病氣は漸次足の神経をも侵し、歩行中幾度かバランスを失つて倒れることがあつた。その度ごとに黙つて涙をかみしめつつも、少しも愚痴めいたことはいわなかつた正樹であつた。身は病床にあつての死淵に近付きつつある苦闘の毎日であつたのに、ひたすら私の健康を心配し、食事や睡眠の時間についても、こまこまと家族の者に指示していたようであつた。私になるべく早く外相という激職をやめるよう勧めてくれたことも一再ならずあつた。付添いの看護婦さんによく本を読んでもらったし、ラジオの放送はもらすことなく聞き、私の国会答弁や討論会についても、自分の感想や評価をそのつど率直に話してくれたものである。池田首相や田中蔵相の答弁や発言は、口調までもまねられるほどになつていた。好きな音楽の鑑賞も怠るところがなかつた。しょっちゅう彼を見舞つてくれた友人知己は、

かえって彼に激励されましたといつてくれるありさまで、病床にありながら、彼の一日一日は、それ自体立派な生活であつた。

三十九年の春は逝き、いつの間にか青葉の五月を迎えた。東大病院に増改築工事はじまつて、環境が喧騒になってきたので、主治医の方に往診を願うことにして、静かな自宅で療養させるべく私は彼を退院させた。その後、病勢は一向に好転のきざしをみせず、眼の力は衰え、手足の神経も順次侵されていった。しかし、彼の心境は、それでも少しも乱れることなく、いつものように自分のことよりも、他の人々のことを案じ、励ますことに終始した。八月五日より六日にかけて、病魔は遂に他の内臓を決定的に侵してきたとみえて、六日の午後五時、高熱の中で「旅に出るから靴の用意をしろ」という言葉を最後に、私をはじめ家族の見守る中に、間もなく心臓マヒを併発し、遂に絶命したのである。

たまたま岳父から分け与えていただいた多磨霊園に、彼は私にさきがけて、彼が最も慕っていた祖父とともに永久の眠りについた。キリスト教が日本に渡来のおり、若年ながら従容として殉教死したパウロ・ミキという少年があつた。彼は生前いたくこの少年に傾倒していたので、洗礼を受けた際、その名をそのまま自分のクリスチャン・ネームとしてい

た。私は「パウロ・ミキ大平正樹」と書いた小さい墓碑を立ててやった。それは父であり友であった私の最後の贈り物となった。一冊の聖書と十字架、彼が好きであったオモチャの自動車や、病中放すことのなかった人形やレコード、そういつたものを抱いて、彼は息つく暇もなく活動し続けた二十六年の有限の生涯を閉じて、別に構えられた世界に出立して行ったのである。

正樹との永別。それは私が夢にだに考えなかったことである。しかるに非情にも、それは動かし難い現実となった。凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた。彼はなにもにも代えられない、いわば私にとっては全部に近い存在であった。重い鉛のような悲愁が、鋭利な刃物のような力で今なお私の胸を刺し続けている。時日の経過によつても、その力は、一向に衰えをみせないのである。